

A大学における 『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』 の記録様式に関する学生の評価

加藤さゆり, 西本亜希子, 荒木さおり, 木村 早希,
林 健司, 松本玄智江, 梶谷みゆき

概 要

『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』の記録様式に関する学生の評価を明らかにし、『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』改訂版作成の基礎的資料にすることを目的として、A大学看護学科3年次生を対象にアンケート調査を行った。

単純集計の結果、『非常に分かりやすい』と『少し分かりやすい』の合計割合が最も高かったのは、情報整理・アセスメントの65%で、次いで、看護計画の60%であった。逆に、『非常に分かりにくい』と『少し分かりにくい』の合計割合が高かったのは、病態・生活機能関連図の40%であった。自由記述内容の分析結果から、【記載方法が分かりやすい】、【ガイドブックは実習で有効活用できる】、【具体的な例の提示が不十分である】、【ガイドブックだけでは目標志向型看護過程の理解が難しい】、【講義と連動させた活用が不十分である】、【指導内容の一貫性がない】の6カテゴリーが抽出された。『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』改訂版には、実習で受け持つ頻度の高い事例を用いた具体的な例を示す必要があること、また、一般的な関連図とあまり乖離しない形で目標志向型思考をベースにしたオリジナルの関連図を考案すること、さらに、目標志向型看護過程における講義や演習方法の工夫と教員間の共通認識を図る必要性が示唆された。

キーワード：目標志向型思考、老年看護過程ガイドブック、学生評価

I. 緒 言

高齢者人口の増加や多死社会の到来で、国民ひとり一人が最期のときまでどう生ききるかを考える時代になってきた。老年看護学教育においては、いかに老年期を生きる人々の多様で豊かな価値観や生活の営みに対する理解を深め、

島根県立大学

個々の高齢者の意向に寄り添った最善のケアを展開できる人材を育てていくのか、その教育方法にも工夫が必要である¹⁾。

A大学の老年看護学領域では、医療施設や高齢者施設など多様な場面で高齢者個々の価値観を尊重し、その人が望むその人らしい生活を見据えた看護の展開を重視する、『目標志向型看護過程』を2012年から導入している。対象の看護問題に着目し、その問題解決を目標とした看

護を展開する問題解決型思考²⁾とは異なり、目標志向型は疾患や障害をもちながらも対象のもてる力とその働きを生活機能の観点からアセスメントし看護展開する³⁾考え方である。導入に併せて、講義や演習、老年看護学実習で活用するためのオリジナル冊子『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック（以下、「ガイドブック」とする）』を作成し、毎年、記載内容のブラッシュアップを図ってきた。しかしながら、初刊から10年を経て、教員目線ではなく学生の意見を反映させたガイドブックの改訂に取り組む必要性がでてきた。その理由は、看護過程を展開する上で「問題解決型の考え方が定着しており目標志向型への発想の転換が難しい」といった学生の声を実習中によく耳にするようになったからである。A大学では主として問題解決型の看護過程を取り入れていることや、ベースとなる看護理論が領域ごとに異なっていることも学生の困難感を高めている要因ではないかと考えられた。

2022年、地域看護の視点を強化した新しいカリキュラムが改正されたことに伴い、高齢者看護においてはますます目標志向型思考の重要性が高まっている。そこで、2024年度の老年看護学実習に向けて、ガイドブックを実習場面でより学生が活用しやすい内容に改訂すること、併せて、学生の理解が段階的に進むような教授方法の検討が急務と考えた。

本研究の目的は、『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』の記録様式に関する学生の評価を明らかにし、『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』改訂版作成の基礎的資料にすることである。

II. 用語の定義

本研究における用語の定義は以下の通りである。

- ・目標志向型思考とは、山田ら²⁾を参考に、疾患や障害をもちながらも対象のもてる力とその働きを生活機能の観点からアセスメントし看護展開する考え方、とした。
- ・評価とは、『目標志向で実践する老年看護過

程ガイドブック』の記録様式における善悪・優劣についてその意義と価値を内容も含めて判断すること、とした。

- ・表1に示す「具体的な例」とは、事例に基づいて詳細に表現や説明が提示された事柄、「要点」とは、物事を中心となる重要なポイント、「記載方法」とは、要点・注意事項・例を含めた記載内容や書き方、とした。

III. 『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』の概要

ガイドブックはA4サイズ全27頁からなる。第1章『生活モデルで考える老年看護』では、目標志向型看護過程を考えるにあたって重要なポイントを6項目挙げ、それぞれ具体的に説明している。それは、1) 医療モデルと生活モデルの統合、2) 医療施設におけるケアから地域包括ケアへ、3) 高齢者が生きてきた、そして生きていく時間軸を描く、4) 環境に対する視点と看護者の調整力、5) 「生活モデル」を看護実践に繋ぐ目標志向型看護過程、6) 「もてる力」を描く、である。第2章『老年看護学実習での展開』は、看護過程の展開についてそれぞれ考え方や記載時のポイントを記している。すなわち、1) 情報収集の方法、2) アセスメント、3) 病態・生活機能関連図、4) その人らしい生活の姿、5) 優先順位の考え方、6) 看護計画、7) 実施と評価である。第3章『実習での展開方法』は、医療施設における老年看護学実習の目的や目標を記している。そして第4章は、全記録様式を展開順に綴じ、様式ごとに記載すべき項目や事柄、具体的な記載例を青字で明示している。具体的には、患者の疾患関連情報や身体的・心理霊的・社会文化的側面、活動・休息・食事・排泄・身じたく・コミュニケーションといった生活情報とアセスメントを記載する<情報整理・アセスメント>、全体像を示す<病態・生活機能関連図>、患者に必要なプランを立案する<看護計画>、実施内容を振り返る<ケア経過・評価記録>、そして、最終的に看護過程を考察する<サマリー>である。

現在このガイドブックは、2年次秋学期開講

の必修科目『老年臨床看護論（2単位60時間）』の看護過程の单元において、テキストと併用した講義、個人およびグループ演習で使用し、3年次秋学期の老年看護学実習で、受け持ち患者の看護過程展開に活用している。本研究の対象である3年次生が2年次生だった秋学期は、当時の科目担当教員が看護過程の初回授業でガイドブックを配付して、講義と個人演習を組み合わせた授業を7回行った。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

量的・質的記述的研究

2. 研究対象

老年看護学実習を履修したA大学の看護学科3年次生85名である。

3. データ収集方法

老年看護学実習全日程が終了した5日後、研究協力の依頼文書とともに、学内情報システム Microsoft Forms にアクセスできるよう調査票の URL を添付したメールで研究協力を依頼した。送られてきた Microsoft Forms 調査票の回答内容を Microsoft Excel 表にまとめ本研究のデータとした。調査内容は、『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』第4章にある①情報整理・アセスメント、②病態・生活機能関連図、③看護計画、④ケア経過・評価記録、⑤サマリー、の記録様式に対する5段階評価とその選択理由、⑥『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』をより使いやすいものにするための提案、であった。①～⑤の5段階評価は、『非常に分かりやすい』、『少し分かりやすい』、『ふつう』、『少し分かりにくい』、『非常に分かりにくい』の多項選択法であった。より具体的な評価を得るための質問項目①～⑤の選択理由および⑥の提案は、字数制限を設けない自由回答法とした。

4. データ収集期間

2022年12月27日～2023年1月31日

5. 分析方法

まず、質問項目①～⑤に関する5段階評価について Microsoft Excel を用いて単純集計を行っ

た。次に、質問項目①～⑤の選択理由と⑥『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』第4章の記録様式をより使いやすいものにするための提案の自由記述内容について、質問項目ごとに Microsoft Excel シートに素データとしてそれぞれ入力し番号を付した。次に、素データを意味内容の類似性の観点で切片化して、素データ番号と紐づけてコード化し、コード番号を付した。各コードの同質性・異質性を検討して類似内容でまとめ、ガイドブックの記録様式に関する学生の評価が記載された内容について抽象度を上げながらサブカテゴリー・カテゴリーを抽出した。すべての分析過程において研究者間で検討を重ね、多角的な視点で捉えることに努めた。

V. 倫理的配慮

鳥根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認（承認番号375）を得て実施した。研究目的、研究方法、学生に生じる負担や予測されるリスクと配慮および利益、研究協力は任意であり協力の有無と実習成績とは何ら関係しないこと、調査票は無記名式のため、調査回答送信後に同意の撤回はできないこと、個人情報保護の方法、データ管理や廃棄方法、研究に関する開示や公開、知的財産権の帰属、研究のための費用や利益相反、経済的負担、研究成果の発表や問い合わせ先について書面に記載し、調査票の送信をもって同意とみなした。

VI. 結 果

A大学の看護学科3年次生85名中、調査回答があった学生は20名であった（回答率23.5%）。有効回答率は100%であった。

1) 単純集計

『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』に示す記録様式、＜情報整理・アセスメント＞、＜病態・生活機能関連図＞、＜看護計画＞、＜ケア経過・評価記録＞、＜サマリー＞について、『非常に分かりやすい』、『少し分かりやすい』、『ふつう』、『少し分かりにくい』、

『非常に分かりにくい』の5段階評価データを単純集計した。

情報整理・アセスメントについては、『非常に分かりやすい』25%、『少し分かりやすい』40%、『ふつう』20%、『少し分かりにくい』15%、『非常に分かりにくい』0%であった。病態・生活機能関連図は、『非常に分かりやすい』20%、『少し分かりやすい』25%、『ふつう』15%、『少し分かりにくい』30%、『非常に分かりにくい』10%で、看護計画では、『非常に分かりやすい』25%、『少し分かりやすい』35%、『ふつう』35%、『少し分かりにくい』5%、『非常に分かりにくい』0%であった。ケア経過・評価記録については、『非常に分かりやすい』15%、『少し分かりやすい』35%、『ふつう』25%、『少し分かりにくい』25%、『非常に分かりにくい』0%で、サマリーは、『非常に分かりやすい』25%、『少し分かりやすい』15%、『ふつう』35%、『少し分かりにくい』20%、『非常に分かりにくい』5%であった。

2) 自由記述内容の分析

『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』第4章に示す記録様式に関する自由記述内容の質的分析の結果、学生の評価として、141コード、14サブカテゴリー、6カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》，コードは「」で示す。【】内の（）の数字はコードの数を示す。

【記載方法が分かりやすい (38)】は、「具体的な例が記載されている」、「何を記載すれば良いか書かれている」など《具体的な例が提示してある》や、「書き方が細かく記されており分かりやすい」、「ケア経過・評価記録は他領域と変わらず取り組みやすかった」といった《記載方法が分かりやすい》、「要点が記載されており分かりやすい」、「ポイントが示されている」などの《要点が示されている》で構成された。

【ガイドブックは実習で有効活用できる (17)】は、「講義で習ったことと合わせて自身で考えて書くことができる」、「情報の整理や看護の焦点を見つける時に役立った」など《ガイドブックを参考に実習で応用できる》や、「冊子を見ればできる」、「冊子になっていることが有効

だった」など《冊子になっており活用しやすい》、さらに、「自己の看護実践による変化を明らかにできた」、「看護計画を詳細に計画しておくことで実践に移しやすい」など《ガイドブックを活用することによる効果の実感》や、「高齢者の持てる力を最大限生かせると思う」、「患者とのかかわりを通して持てる力を発見することができた」、など《ガイドブックは持てる力の発見につながる》で構成された。

【具体的な例の提示が不十分である (48)】は、「具体的な記載例があればもっと分かりやすい」、「どこまで詳細に記載すれば良いか分かりにくい」といった《具体的な例がなく分かりにくい》や、「具体的な事例を用いた記載例を提示してほしい」、「これまでの実習で実際に学生が記載した例を提示してほしい」など《実習に即した具体的な例を提示してほしい》で構成された。

【ガイドブックだけでは目標志向型看護過程の理解が難しい (21)】は、「他の領域の関連図と違うため難しかった」、「関連図の実際の書き方が分からない」といった《病態・生活機能関連図の理解が難しい》や、「補足資料内容が参考になった」、「2年次にサマリーを記載することがなかったためガイドを見てもイメージしづらかった」など《サマリーの理解が難しい》、「目標志向型で看護の焦点をあげることが難しかった」、「患者にとって何が問題なのか考えてしまう」など《目標志向型看護過程の理解が難しい》で構成された。

【指導内容の一貫性がない (10)】は、「先生方によって解釈が異なっていた」、「先生によって書き方の指定が違った」など《ガイドブックの教員間の共通認識を求める》が抽出された。

【講義と連動させた活用が不十分である (7)】は、「授業中の実践と冊子の活用でよりイメージが膨らむ」、「講義内でもガイドブックを活用すると良い」といった《講義と連動させてガイドブックを活用する》が抽出された。

VII. 考 察

単純集計では、情報整理・アセスメントや看

表1 目標志向型老年看護過程ガイドブックに対する学生の評価（カッコ内の数字はコードの数を示す）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
記載方法が分かりやすい (38)	具体的な例が提示してある (23)	具体的な例が記載されている (11) 何を記載すれば良いか書かれている (8) 情報収集の項目が具体的に提示されている (2) SOAPの一連の流れが示されている (1) 具体的な記載方法が身につく (1)
	記載方法が分かりやすい (13)	書き方が細かく記されており分かりやすい (7) ケア経過・評価記録は他領域と変わらず取り組みやすかった (2) どこに何を記載すれば良いかが分かる (1) 記載する際の注意点が書かれており分かりやすい (1) 見ただけで何を書けばよいか分かりやすい (1) 書きやすかった (1)
	要点が示されている (2)	要点が記載されており分かりやすい (1) ポイントが示されている (1)
ガイドブックは実習で有効活用できる (17)	ガイドブックを参考に実習で応用できる (7)	講義で習ったことと合わせて自身で考えて書くことができる (1) 情報の整理や看護の焦点を見つける時に役立った (1) 病態それぞれについて書かれているので、受け持った患者の疾患について書かれてあるところを実際に参考にして展開できた (1) 病院実習で参考にしながら展開できた (1) 実習で参考にしてサマリーを書き、理解出来た (1) 病院実習で実際にそれを踏まえ個性を足し考えることが出来た (1) 講義で得たことをメモすることで実習に活用することができる (1)
	冊子になっており活用しやすい (5)	冊子を見ればできる (3) 冊子になっていることが有効だった (1) 一冊にまとまっていることで分かりやすい (1)
	ガイドブックを活用することによる効果の実感 (3)	自己の看護実践による変化を明らかにできた (1) 看護計画を詳細に示しておくことで実践に移しやすい (1) 毎日の経過記録から、看護計画の評価ができた (1)
	ガイドブックは持てる力の発見につながる (2)	高齢者の持てる力を最大限生かせると思う (1) 患者とのかかわりを通して持てる力を発見することができた (1)
具体的な例の提示が不十分である (48)	具体的な例がなく分かりにくい (39)	具体的な記載例があればもっと分かりやすい (23) どこまで詳細に記載すれば良いか分かりにくい (3) アセスメント内容が具体的に書いてあるとさらに分かりやすい (2) 情報の整理の分類についてどこに何を書けば良いか分からない (2) 記載例がないことで分かりにくい (2) どのように記載すれば良いか内容が分からない (2) SOAPの書き方が難しかった (2) アセスメント内容が重複した際にどう記載するかが分かりにくい (1) 書く時の注意点やポイントを記載してほしい (1) 分かりやすいところも分かりにくいところもある (1)
	実習に則した具体的な例を提示してほしい (9)	具体的な事例を用いた記載例を提示してほしい (6) これまでの実習で実際に学生が記載した例を提示してほしい (1) 意識混濁や認知力低下のある患者に対応する例を提示してほしい (1) 具体的な記載例が2つあるとより使いやすい (1)
	病態・生活機能関連図の理解が難しい (8)	他の領域の関連図と違うため難しかった (5) 関連図の実際の書き方が分からない (1) 関連図について詳しい説明を加えてほしい (1) 関連図の具体的な図が欲しい (1)
ガイドブックだけでは目標志向型看護過程の理解が難しい (21)	サマリーの理解が難しい (8)	補足資料内容が参考になった (3) 2年次にサマリーを記載することがなかったためガイドを見てもイメージしづらかった (2) あまり具体的に学ぶことができておらず分かりにくく感じた (1) サマリーがいまいちよく分からない (1) 初めて書いたため (1)
	目標志向型看護過程の理解が難しい (5)	目標志向型で看護の焦点をあげることが難しかった (2) 患者にとって何が問題なのか考えてしまう (1) 目標の言い回しや内容について目標志向型で考えるのが難しい (1) 看護の焦点への繋げ方が難しい (1)
指導内容の一貫性がない (10)	ガイドブックの教員間の共通認識を求める (10)	先生方によって解釈が異なっていた (5) 先生によって書き方の指定が違った (2) 参考にしたが違うと言われた (1) 記載例に基づいて統一して指導してほしい (1) 先生方で共通認識を持ってほしい (1)
講義と連動させた活用が不十分である (7)	講義と連動させてガイドブックを活用する (7)	授業中の実践と冊子の活用でよりイメージが膨らむ (1) 講義内でもガイドブックを活用すると良い (1) 講義内でも記録の演習を行う (1) 講義内で詳しく説明してほしい (1) ガイドブック内に授業で行う看護過程の例も一緒に挟んでほしい (1) 講義にあった公式を再度記載するとわかりやすい (1) 冊子だけをみて理解するのは難しい (1)

看護計画について、『非常に分かりやすい』と『少し分かりやすい』の合計割合が6割以上あった。情報整理・アセスメントは、項目ごとに記載すべき情報とアセスメントの視点を示してあるため、学生は理解しやすかったと思われる。また、看護計画は、記載例だけでなく悪い例も示してあり、容易に理解できたと考えられる。これを支持するように、質的分析でも、《具体的な例が提示してある》、《記載方法が分かりやすい》、《要点が示されている》などコード数が2番目に多い【記載方法が分かりやすい】が抽出され、ガイドブックの記録様式に対し肯定的に評価する学生の存在が明らかになった。またこのような学生は、「講義で習ったことと合わせて自身で考えて書くことができる」や「冊子を見ればできる」など、目標志向型思考の理解や応用力が定着していたとも考えられる。そして、実習でガイドブックを活用して看護過程を展開したことで、「自己の看護実践による変化を明らかにできた」や「高齢者の持てる力を最大限生かせると思う」といった【ガイドブックは実習で有効活用できる】を実感することにつながった。

一方で、ケア経過・評価記録やサマリーは、単純集計で『非常に分かりやすい』と『少し分かりやすい』を合わせてそれぞれ5割と4割に留まるなど、理解に苦慮した学生が半数以上いた。ケア経過・評価記録は、主観的情報と客観的情報、アセスメントと計画からなる一般的なSOAP記録を指す。また、サマリーは、立案した看護の焦点と看護計画に対し、実践してきた看護について患者の経過とともに振り返る記録である。いずれも、ガイドブックには、記載すべき視点を示してあるものの説明のみで具体的な例を示していないこと、また、サマリーは、他領域の実習で記載した経験がないため、学生はイメージしにくかったと思われる。質的分析でも「補足資料内容が参考になった」と回答しており、実習中に配付した資料内容を改訂版のガイドブックに網羅する必要性が示唆された。

また、《具体的な例が提示してある》と相反する【具体的な例の提示がなく不十分である】が最も多いコード数であったことから、学生の多くは現行の記載例では満足しておらず、より

詳細な書き方の提示を求めていることが明らかになった。ただ、分かりにくいと評価した学生は、「これまでの実習で実際に学生が記載した例を提示してほしい」や「意識混濁や認知力低下のある患者にも対応する例を提示してほしい」など安易に回答を求める傾向にあり、具体的な例を示す必要がある一方で、学生の思考過程を遮るようなことは回避しなければならない。そのため、学生が実習で受け持つ頻度の高い事例に基づいた具体的な例を示すことで、模範解答でなくても学生自身で思考・判断ができるようになることを期待する。

病態・生活機能関連図は、記録様式の中で最も難易度が高いことが明らかになった。【ガイドブックだけでは目標志向型看護過程の理解が難しい】にある《病態・生活機能関連図の理解が難しい》理由として学生は、「他の領域の関連図と違うため難しかった」や「関連図の実際の書き方がわからない」を挙げている。病態・生活機能関連図は、全体像を捉える際に、高齢者が望む生活は何かを重視し、生活が円滑に営めないとすればなぜか、疾患や障害は高齢者の生活にどのように影響を及ぼしているのか、病態について分析する必要がある、同時に、高齢者の持てる力にも着眼しなければならない³⁾。また、その『持てる力』には高齢者が生きてきた生活史の中で培った心理社会的な『強み』や人間の成熟に関連した『力』等も関与する⁴⁾とあり、持てる力の発見は未経験の学生にとってハードルが高い。

このように、病態・生活機能関連図は、高齢者の生活機能に主軸をおき、背後にある病態を記載する。一般的な関連図と異なる点は、上段に“病態”，そこから下方に向かって順番に“生活への影響”，“看護の焦点”，“予測される危険性”を矢印で示していくことにある。また，“持てる力”を各所に配置する点も他とは異なる。言い換えれば、どこに何を書くのか指定されているため比較的自由度が少ない様式ともいえ、これが学生の難易度の高さにつながっているとも考えられる。一般的な関連図とあまり乖離しない形で目標志向型思考をベースにしたオリジナルの関連図を考案する必要性が示唆された。

他方、病態・生活機能関連図の記録上の困難さは、《目標志向型看護過程の理解が難しい》を反映しているとも考えられる。何故なら病態・生活機能関連図は、患者情報やアセスメントを図式化し、最終的に看護の焦点を導き出す必要があることから、病態・生活機能関連図はその学生の目標志向型思考プロセスそのものと考えられるからである。学生が「患者にとって何が問題なのか考えてしまう」ように、問題思考に慣れていない学生にとって、患者の持てる力にフォーカスして看護を見出すことは難しい。北川⁵⁾は、『学生は自分の頭で、自分の親よりさらに年長の高齢者が望んでいるあるべき姿を、あかかもしれない、こうかもしれないと考えなければならない。答えを絞りきれず、優先順位もつかない。この宙吊り状態に対して、問題解決型思考になじんだ学生は耐性が乏しく、一つの正しい回答を求めたがる』と述べている。そして、高齢者の模擬体験や高齢者へのライフヒストリーインタビュー、参加型学習など実習前教育を行い、高齢者に対する生きた体験から、目標志向型思考を基盤とした実習に進んでいくことが望ましい⁵⁾ともいう。

そう考えると、目標志向型とはどういう考え方が、どうすれば持てる力の発見ができるか、そもそもなぜ老年看護実践には目標志向型思考が向くのかについて、学生の理解が深まっていないことが根本的な課題であるように思われる。そのためには、学生評価の【講義と連動させた活用が不十分である】に示される「授業中の実践と冊子の活用でよりイメージが膨らむ」や「講義内でもガイドブックを活用するとよい」を参考に、目標志向型看護過程の講義や演習方法の見直しを図る必要がある。

また、【指導内容の一貫性がない】とし、『ガイドブックの教員間の共通認識を求める』声もあった。各教員は、実習場でガイドブックを活用して学生に助言をしている。同じ説明であっても、言葉のニュアンスや受け持ち患者像、学生の理解力等で、解釈の違いを指摘されることもあるが、今回の学生評価は真摯に受け止める必要がある。実際、対象学年においては、看護過程の授業に老年看護学領域の全教員が参画で

きておらず、教員間の共通理解が不足していたことは否めない。その意味では、本研究の分析過程における様々な議論が、ガイドブックの記載や指導内容に対する共通理解につながったと考えられる。

VIII. 研究の限界と今後の課題

研究目的は、『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』の記録様式に関する学生の評価を明らかにし、改訂版作成の基礎的資料にすることであった。倫理的な観点から調査票を無記名にしたため、対象学生と看護過程記録の内容を関連づけて分析することが出来なかったことは本研究の限界である。また、調査票の回収率が低く結果に影響したことは否めない。今後、回収率アップに努め、ガイドブック改訂版を活用した新たな学生を対象に調査を行う。

IX. 結 論

単純集計の結果、『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』で、学生が比較的『分かりやすい』と評価した記録様式は、情報整理・アセスメントと看護計画であった。逆に、学生が『分かりにくい』と評価した記録様式は、病態・生活機能関連図であった。また、自由記述内容分析から、『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』の記録様式に関する学生の評価は、【記載方法が分かりやすい】、【ガイドブックは実習で有効活用できる】、【具体的な例の提示が不十分である】、【ガイドブックだけでは目標志向型看護過程の理解が難しい】、【講義と連動させた活用が不十分である】、【指導内容の一貫性がない】であった。

学生にとって有用性のある『目標志向で実践する老年看護過程ガイドブック』であるためには、実習で受け持つ頻度の高い事例に基づいた具体的な例を示すことや、一般的な関連図とあまり乖離しない形で目標志向型思考をベースにしたオリジナルの関連図を考案する必要がある。また、ガイドブックだけでなく、目標志向型思考の理解が深まるような授業内容の見直し

と教員間の連携強化が重要である。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に
深謝いたします。

COI

利益相反なし

文 献

- 1) 山田律子. 未来の老年看護学教育に向けて.
老年看護学, 2015; 20(1): 54-58.
- 2) 岡村絹代, 樹神千尋, 名和祥子, 他. 本学
における老年看護学教育の現状と課題 (第
1報) 老年看護学実習における目標志向型
思考での看護過程の展開. 朝日大学保健医
療学部看護学科紀要, 2020; 6: 69-73.
- 3) 山田律子, 内ヶ島伸也. 生活機能からみた
老年看護過程+病態・生活機能関連図 (第
4版). 2020; 東京: 医学書院.
- 4) 松波美紀, 箕浦とき子, 温水理佳, 他. 高
齢患者の“持てる力”の活用を強調した老
年看護学実習の検討-実習記録の分析から
-. 老年看護学, 2008; 12(2): 60-66.
- 5) 北川公子. 特集 生活機能・目標志向からみ
た老年看護 目標志向型思考で探索する高
齢者の“もてる力”. 看護教育, 2010; 51(10):
856-861.

Students' evaluation of the recording format of the "Geriatric Nursing Process Guidebook for Goal-Oriented Practice" at University A

Sayuri KATO, Akiko NISHIMOTO, Saori ARAKI, Saki KIMURA,
Kenji HAYASHI, Ichie MATSUMOTO, Miyuki KAJITANI

The University of Shimane